



miho Hatanaka,

2019年、世界中が新型コロナウイルスに翻弄される前の一年は、私の身近な者たちが相次いで亡くなった。年が明けてすぐに父が、春に20年飼っていた猫が、夏に慕っていた伯母が。悲しいには違いなかったが、いずれも大切なことを学んだ死であった。今回は、その年の秋に書いた詩と、一枚の写真を。



【第18話 いのちのうた 3 : わたしのコトバ】

伯母に、その弟である父が亡くなった事を伝えたのは私だった。遠方に暮らしている年に一、二度会える程度だったが、自宅には幼い頃から頻繁に遊びに行き、大人になってからもいっしょに句集を作ったり家の片づけを手伝ったりして慕っていた伯母である。歳をとって一人暮らしになり、不便もあって施設に入居するようになったが、子のいない伯母は父と母を頼りにしていたことと思う。入居していた施設にいつものように見舞い少し世間話をした後、「おばちゃん、お父さん亡くならはったわ」と伝えた。伯母は身体機能的には衰えがみられたが認知機能的には全く問題なく会話も滞りなく行え、訪ねた時には冗談を言い合っっていっしょに笑うこともあったので逆に動揺するだろうかと気にしていたが、私が父のことを話すと少し黙り、「そうか」とだけ言った。その静かな感じが余計に、私には伯母と父の、“きょうだい”であることを感じさせた。

その伯母が亡くなった時には、私は伯母に死に化粧を施し、自宅を片付けた。伯母は生前、自分の母であり私が実家で同居していた祖母のことを「おばあちゃんはええなあ。孫にこんなに思ってもらって」と言っていたが、私は今、伯母のことを想い手を合わせる。「おばちゃん、大丈夫え。私がおばちゃんのこと忘れへんさかいに」。伯母には届くだろうか、しかし伯母のことを想うのは私にとってこそ大事なことなのかもしれない。

わたしの おとうさんが しにました。

86 さいでした。

おとうさんがしぬとき

わたしはずっと いちばん そば にいました。

それまでも 4 日間のあいだ

ほとんどそばについていて

おとうさんはわたしがいることをわかっていたとおもう。

おとうさんがしなはる さいご のひ

もうしんどいじかんがながくならないように

「おとうさん もう よろしいか？ しんどいのが長くなるのは かなんよね」

とたずねると

おとうさんは 「うん」 とうなづいた。

さいごのくすりをもらったあと

おとうさんはおだやかでした。

そして

おかあさんも ○○くんも ○○ちゃんも ○○も ○○も

みんなでそばにいるときに

にっこりと 笑わはってん。

ものすごく いい えがお やった。

「ああ、おとうさん、ありがとう、いうてはるわ」

わたしはそういうて

みんなも ふふふ と わらいました。

そのあと

ひとつ

ひとつ

ひとつ…

だんだんと

こきゅうの かんかく はながくなって行って

“もう おわりやろか？”と 思てたら

もひとつ

「すう…」

と いきをすわはった。

そしてそのあと

もうにどと

おとうさんはいきを はくことも
すうことも
しはらへんだ。

おとうさんがいきた さいご のさいご のひとこきゅうまで
わたしは
そばにいました。

ひとが しぬ というとき
こんなにもしずかで
こわい とか おそろしい とかおもわずに
おだやかさにつつまれるということを
わたしはさいごに おとうさん からおしえてもらいました。

そのひのゆうがた
おとうさんのへやのまどからは にじ がみえていました。
おとうさんがにじをすきやったということを その日はじめて おかあさんからきいた。
おとうさんは
にじにのって いかはったのやと思う。

* * * * *

20ねん いっしょにくらした ねこ が しにました。
にんげんの とし でいうと
もう80さいはとうにすぎている おじいさんねこ でした。
おじいさん とはいっても
いえには にんげん のこどもたちも4にんいたので、
その10ねんほどまえにしんだ もういっぴきのねこ と、
みんな おなじようにそだち くらしていて
たぶん “ねこほんにん” は じぶん も、
“このいえのこども” だとおもっていたとおもう。

だから おじいさん でも
わたしはなんとなくまだずっと いきていそうに
おもっていたのです。

「なんかこのごろ あんまりたべへんな」とおもっていたら
ほんのすうじつのあいだに
あらあら と

くっきーのようなえさがたべられなくなり
ぜりーのようなえさがたべられなくなり
みずが のめなくなって
あるくのが どんどん へた になって

それでも

なんというのでしょうかね ねこは ひとり になりたかったのかな…

「いよいよ かな」とおもったそのひ
まださむい春だったのに
つめたいろうかのすみに行ったり
げんかんのたたきにねそべって

「あんなつめたいところでしんでしまうのはかわいそうやな…」
と おもったけれども
もう すきなようにしたらいいな とおもってただみていました。

よる、
ねこのいるへやにわたしはふとんをもって行って
とてもしずかな ながいよる をかんじていました。 すると。
ねこ はわたしのねどこにやってきて
ぱたんとよこになったのです。

「ここでねる？ いいよ。おふとん、かけてあげようね」

そうやってねこもねはじめたので
わたしはいつのまにか
ねていました。

はっとしてあさ めがさめると
ねこはまだいきをしていた。
ああ、よかったとおもってすこしその場をはなれ もどってきたら
いきがとまっていた。
え？
なんで？ ちょっとまって ほんの ほんのすこしまえのことよ？
いきをしていたのに！

でも よくよくみると
むねのところが
ことん ことん
と ほんのちいさく うごいていた。
いそいで ○○ちゃんをおこして
「もう、そろそろだとおもう」
と ふたりでみていると

なんかいか

ことん ことん

としんぞうがうごいたあと
もうにどと うごくことはありませんでした。

きれいな晴れの朝
まぶしいくらい

ねこ は
わたしがねている間にではなく
わたしがおきるのをちゃんとまって
しんだのかなあ？

「かあさん さよなら」
と
ねこが いてくれたようです。

* * * * *

人が死ぬとき ねこが死ぬとき
どっちもおんなじやなあ と
わたしはおもいました。

たいせつな者たち。
たいせつにしていると
いきているさいごの うごき まで
そばにいさせてもらえるんや…

わたしのおばちゃんは
なつのあさ、 びょういでひとりでしたけど
そのなくなるほんの少し前には
かんごしさんに
「おんがく ききたいわ」っていったそうです。

「おんがく ききたい」っておもったおばちゃんは

たぶん そのあさも
そのまえの日のあさとほとんどなにもかわらずに
「おんがく ききたい」っておもったとおもうし、
くるしいとか いたいとか
おもってなかったとおもう。

おばちゃんはしぬなんにちかまえに
「みほちゃんは おぼんにはかえってきはるんか？」と
母にきいていたそうだから
おぼんがすぎてすぐの そのひ も
わたしのことは “きっと”
わすれてしまったりしないまま
しんだのだろうとおもう。

* * * * *

おとうさん
ねこ
おばちゃん

みんな しぬとき そんなかわらへんな。
おんなじやな。

たべられへんようになっていって
みずがのめへんようになって
おしっこが出えへんようになって
いきがちいさくなっていって
しんぞうがとまって。

どんなふうに みえているのだろう ほんにん たちにとって さいごのこの世 は。

ものすごく
いきものとして
あたりまえの ながれのなかで
しずかに
ぼ っと
いのちがおわっていくことの
おごそかであることをおもう。



sky